コレクション紹介

ルリスタン青銅器と近年のオマーンでの発見について

三木健裕[1]・黒沼太一[2]

ルリスタン青銅器とは、およそ紀元前13世紀から紀元前6世紀まで、西アジアのイラン西部、ルリスタン地方で製作されたと考えられる、青銅器・青銅製品である。人物や動物など精緻な図像を特徴とする（図２）。本館考古美術部門はこのルリスタン青銅器をふくむ、730点以上のイランの金属器を所蔵している。これら所蔵品は1960年代前半、東京大学イラク・イラン遺跡調査団がイラン北部にある秘境、デーラマン地方で墓地遺跡を発掘した際に、現地で採集・寄贈あるいは購入により取得したものである。その大部分に関しては、1980年代に保存修復と整理が行われ、千代延惠正と松谷敏雄によって、本館資料目録にまとめられた。

ルリスタン青銅器のなかでも異彩を放つのは、竿頭飾である（図２）。この竿頭飾は、腹部にも顔をもつ場合のある人物ないし神の装飾部分と、その装飾部分を突き刺す円筒形の基部にわかれる。装飾部分に関しては、中央の人物ないし神が2匹の猛々しい動物を掴んだ「マスター・オブ・アニマルズ」という特徴的なモチーフが頻繁に現れる（図２、３）。このモチーフは、古代西アジア世界において広く好まれた。裏と表の二面ともに同じモチーフを有しており、ローマ神話の双面の神ヤーヌスのようである。三次元モデルを作って裏と表を比べてみると（図３）、ほぼ同形であることがわかる。墓地遺跡から出土したルリスタン青銅器の研究成果からは、「マスター・オブ・アニマルズ」のモチーフを有する青銅製品は、紀元前8～6世紀にかけて特によく製作されたことがわかっている。しかし、この竿頭飾の用途はまだよくわかっていない。

ルリスタン青銅器のほとんどはイランで発見されている。ところが、古代の状況は違ったようだ。イランの対岸のア

図１　イランとオマーンの地図.

図２　本館所蔵ルリスタン青銅器.

ラビア半島東端に位置するオマーンのハジャル山脈は、古代より現在まで銅鉱の産地として知られてきた。近年、内陸部の砂漠地帯にあるウクダット・アル＝バクラ遺跡で、古代の製錬址と考えられる遺構が見つかった。なんとそこから、現地の青銅器とは異なる、ルリスタン青銅器とよく似たものが発見された。果たしてルリスタン青銅器を製作する工人が、オマーンで作ったものなのだろうか？残念ながら、実態はいまだよくわかっていない。現在得られている考古学的な証拠を総合すると、ルリスタンから工人が来たのではなく、むしろ熔かして新たな銅製品の素材として再利用するため、遠方のルリスタン青銅器をふくめ、当時オマーンにあった様々な青銅器が砂漠の遺跡へ集められた可能性が高い。古代の湾岸世界では、ルリスタン青銅器が広く流通していたようである。そうだとしても銅の産地に近いオマーンで、なぜわざわざ青銅器を熔かして再利用する必要があったのか？謎は深まるばかりである。

本学駒場キャンパスにある中東地域研究センターに設置されたスルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座は、オマーン国政府からの寄付金によって運営されている。2022年は、日本・オマーン外交関係樹立50周年にあたる。その記念事業として、本学駒場博物館内で1年間にわたる常設展示「オマーン展：躍動する大地」が2022年6月より開催されている。筆者らはそのなかの「古代の都市文明と銅の交易」に関する展示を担当し、上述のルリスタン青銅器5点のほか、現代民芸品の銅製注口碗を展示している。ぜひ駒場まで足を運んでいただき、この短文では語り尽くせない、謎多きルリスタン青銅器とオマーンの銅に魅せられてほしい。

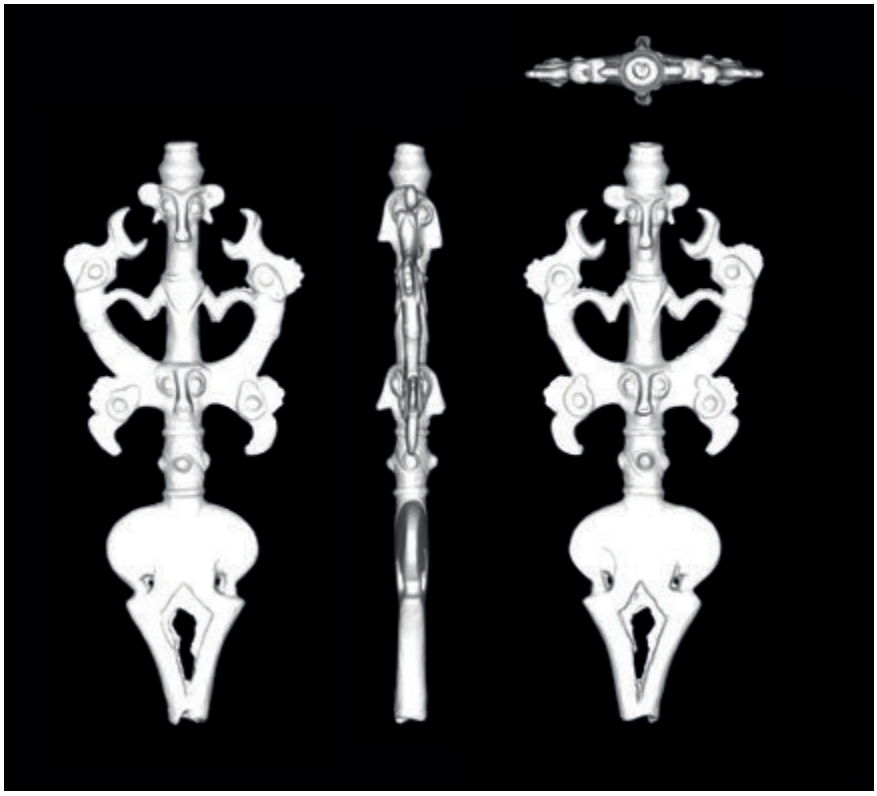

図３　本館所蔵ルリスタン青銅器の三次元モデル四面展開図.

図４　オマーン展の様子.

（[1]本館特任助教／西アジア考古学、
[2]日本学術振興会特別研究員PD／
西アジア考古学）